



羅針盤



藤本 亘

Wataru Fujimoto

川崎医科大学皮膚科 教授

The future is yours !

今月はフレッシューズ特集号である。私が皮膚科医となった当初は見るもの、聞くもの、すべてが新しく、感動し、それが学ぶための原動力となっていた。初めて外勤に出たときには、主要な皮膚疾患の診断と治療のポイントが1冊にまとまった本を携えていき、診断や治療法がわからなかったときには教室に戻って先輩の先生に尋ね、参考書を繙いたりした。また、学会発表が決まれば図書館に籠もって『医学中央雑誌』や『日皮会誌』の索引を調べ、関連の文献を片っ端から探すことから始めた。

星霜移り、美しいカラー写真を掲載する皮膚科の教科書、解説書、雑誌の数が著しく増加しているだけでなく、インターネットの時代、文献検索は机上で済ませることができ、出張先であってもスマートフォンをちょっと触れば、臨床上の疑問への回答が素早く得られる便利な世の中になった。新しい知見は医療系サイトから毎日のように電子メールで届けられ、読む暇がないので削除に追われる日々。フレッシューズにとって、便利ではあるが感動を得にくい環境になりつつあるのかもしれない。

本特集号では、皮膚科の研修をまさに始めようとスタートラインに立っている若い先生方に3つのことを伝えたい。

第1に、診療に際しもっとも基本的な姿勢を常に忘れないでほしいということである。「近代医学の父」とみなされている Sir William Osler の有名な言葉に、“Listen to the patient, he is telling you the diagno-

sis.”がある。診断における医療面接の重要性を、これ以上の確に簡潔に表現している言葉を、ほかに知らない。診療が成功するか否かは、Osler のこの言葉をあなたが忠実に守っているかどうかにかかっている。

第2に、皮膚科診療の醍醐味をできるだけ多く経験してほしいということである。皮疹がいかに多彩であることか、また1つの皮疹が実に多くのことを物語っていることか、ということにいつまでも感動できる皮膚科医であってほしい。

第3に、学会・研究会をしっかりと活用してほしい。インターネットで情報を得ることをDVDでみる映画にたとえれば、学会・研究会はシアターで映画や芝居をみることに相当し、限られた情報であってもインパクトは大きい。あなた自身が経験した疾患について学会で発表し、それを論文化していくことが、皮膚科学をより深く味わい、楽しめるようあなたを成長させることは言うまでもない。また学会では臆せず質問し、他大学・病院の先生方と交流することも忘れないでほしい。

本号では、フレッシューズに必修と思われる実践的な事項について、できるだけ平易に解説することを基本として編集したが、「病理組織」「ダーモスコープ」などは特集号で触れるには分量が多すぎたためあえて割愛した。皮膚科医として歩き始めたあなたが、本特集号の内容に一つでも参考となる記述を見つければ、これ以上の喜びはない。